北海道大学附属図書館報

楡陰

The Hokkaido University Library Bulletin　No. 67　Nov. 1985

思い出雑感

医療技術短期大学部教授

坂　本　三　哉

私が医療技術短期大学部に勤務して早くも2年半が過ぎました。しかし図書館の利用に関してはいまだ医学部のそれを全面的に頼っている次第です。私が図書室(館)を足繁く利用するようになったのは，学部を卒業し，自分の研究方向が定まってからのことです。研究は自然科学系のため，読書により教養を身につけたり，想像力を養うなどと言う恰好のよい話とは無縁でした。新知識の会得と情報の収集が主体でした。

当時，医学部は附属病院図書室と医学部図書室に分かれておりました。附属病院図書室は主に和書の雑誌文献が収納されており，その位置は旧精神科病棟へ通じる廊下の途中にありました。その廊下はシベリア街道と称されるにふさわしく，寒くて長いものでした。さらに床板は歩行のたびに大きく波打ち，その波動で足早に歩くのが困難になるという，まさに芸術的な廊下でした。建物はラセン階段で上下する木造二階建でしたが，どういうわけか非常に明るく手狭でした。また暖房も十分に行きとどいていました。寒くて長い廊下を歩いて辿り着いた体には非常に心地好い場所でした。そこで意中の論文を捜し当てた時など，若さ故の感激からほのぼのとした満足感にひたったことを鮮明に記憶しております。

一方医学部図書館は基礎棟にあり，主として洋雑誌，文献が収納されておりました。季節の関係もあると思いますが，多少薄暗くまたほんの少し黴くささを感じる部屋でした。とくに私の専門とする雑誌のある奥まった棚は，さらに薄暗い印象でしたが，その分だけ何か重厚で学問的雰囲気が強くありました。当時は書籍，雑誌の数は多くなく，自分の専門分野でも4，5種類の書籍文献を当たるだけで十分でした。

昭和40年前半の学園紛争時には図書館としばらく無沙汰しているうちに医学部創立50周年記念事業の記念会館の一部が新医学部図書館となり昭和45年にはすべてが統合され，現在に至っているようです。その頃より情報化時代となり書籍雑誌の数もかなりの量となって来ました。それと共に私の図書館通いも頻繁となっております。医学部図書館で特記すべきものとして，夜間開館，オンライン情報検索システムなどがあります。最近ではコピーの普及と合いまって文献情報の入手は以前より簡便化されて来ています。しかしやはり文献はその掲載されている雑誌を直接手にとって検分し，コピーすることが良策と考えます。コンピューターによる文献探しは，何か機械まかせで，空虚感を伴います。それ故各図書館では，書籍，雑誌の打切

りなどは夢々なさらぬよう切願する次第です。また情報量が多くなると感激性が薄くなるのは馬齢を重ねたためだけではなさそうな気がする昨今です。最後に夜間開館について，もう一歩進めて午後に開館しその分夜間延長をと馬鹿げたことを考えながら筆を置きます。

農業経済学の歩みと学科の蔵書

農学部農業経済学科図書室

I. はじめに

学科の教官・院生・学生の他に，学内外からの利用者が直接または学部図書掛をとおして農業経済学科図書室を利用しているが，利用者の中には「何か貴重な資料がありそうだ」，「ここは資料の宝庫ときいているが」といって来られる人も多い。「とにかく書庫の中を見せてもらいたい」といわれる時も少なくない。たしかに図書館，図書室は「知識の宝庫」である。思いもよらなかったものを見つけたら喜びも大きいだろう。そっとしておいて，いつまでも「宝庫」にして置くのも良いかも知れない。しかし図書室の蔵書は多くの利用者に利用されることが望ましく，それが図書室の重要な役割でもある。もちろん，利用されるためには保存と検索トゥールの整備が十分になされなくてはならない。当学科図書室も現在のように利用される図書室になったのは長い年月を経た後であり，何万という「宝」がその年月の間に積った塵の中から一冊づつ取り出されたのも 1960 年 (昭和 35) 以後のことである。この長い年月とはまた農業経済学科の歴史でもあり，農業経済学の歩みでもある。研究者や学ぶ者が資料を伝達される知識として彼らの歩みとともに日々蓄積し，人が去った後も残り続けて変らず次の世代に語りかけているのが蔵書である。ここでは当学科図書室の歴史と農業経済学の歩みを概観するとともに，蔵書の中から特色あるものについて二，三紹介したいと思う。

II. 学科図書室の歩み

1. 資 料 室　学科開設 1918 年 (大正 7) から 1970 年 (昭和 45) まで主として学科事務を行い，図書の支払業務，寄贈雑誌類の受入れを他の事務と並行して行っていたようである。しかし保存されている手書きの目録カードの分類(農経独自の数字記号 1～33 台まで)や筆跡を見ると，実際に図書の仕事をしていたのは当時の副手あるいは助手であったようだ。資料室に続いて書庫があるが，昭和 35 年頃までそこには裸電球がともり，物置化した足の踏み場もない三層の書庫であった。

2. ウエストコット・ルイス ライブラリー　当時学科でマーケティングの教育・研究に携わっていた G・W・ウエストコット博士 (マサチューセッツ大学との間の教授交換協定により 1958 年 (昭和 33) に来学) は，戦中戦後の外国書の不足を補充するため，学科内に外国文献図書室(仮称)を創設する計画をし，在ニューヨーク経済および文化事業委員会 (A・B・ルイス博士の協力で) よりの資金で，ライブラリアンを加え 1960 年 (昭和 35) 図書室の開設にこぎつ

G・W・ウェストコット博士

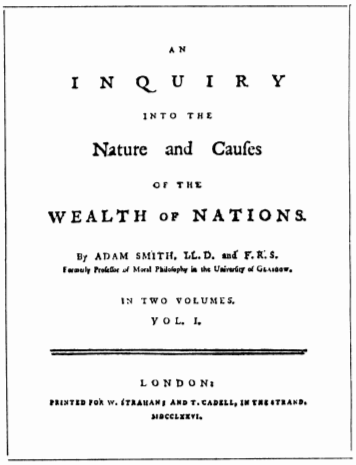
けた。約5千冊の洋書，視聴覚機器を備え，目録カード（著者名，書名，件名）作成，レファレンスを開始した。同時に資料室，会議室等に散在していた政府刊行物，逐次刊行物の整理を開始，2年後から資料室の書庫と各講座の研究室の図書の整理（農経独自の分類からデューイ十進分類へ記号変換とカード作成）を学部図書掛と開始した。

3. 学科図書室（ウエストコット・ルイス　ライブラリー）　1969年（昭和44）農学部三階正面にある資料室とウエストコット・ルイス　ライブラリーが合併し，現在の学科図書室となった。定員事務官1（教育職），事務補助員1，蔵書数は和書約5万冊，洋書約3万冊，和雑誌約350タイトル，洋雑誌約150タイトル，政府刊行物約200タイトル（いずれも講座分を含む）。年間貸出は平均2,300冊，レファレンスは一日平均5件である。目録カードは件名を含め副出を行い，図書室整備については図書委員会（各講座の教官5名，図書室1名）で計画，検討を行っている。

III. 農業経済学研究者と蔵書の特性

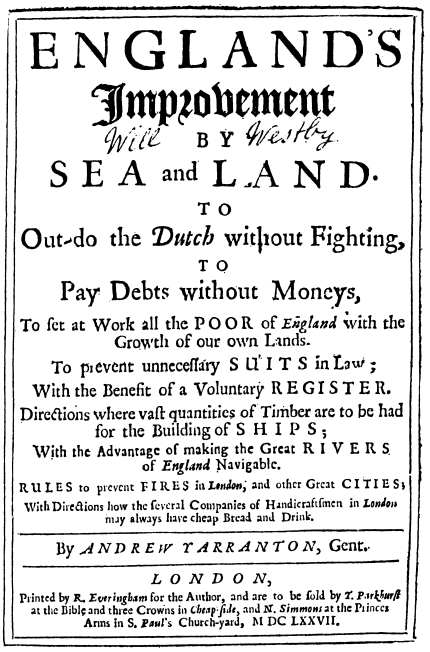
広汎な領域にわたる学科の蔵書構成を主題別にみると，ある一定の時代に収書されそれ以後は新しい図書が加わらない主題分野と，時代の移行，社会情勢の動き，さらに科学技術・産業の変化や進展にともなって増加したり，新しく加わる主題分野がある。学科図書室の書架も，講座の15の研究室も同じ状態であるが，これが農業経済学の研究を進めていくためには必要な状態ともいえよう。すなわち何世紀にもさかのぼる古書であろうと，その重要さは新書に勝るとも劣ることはないのである。図書室の目録カードは現在も過去においても購入講座名が附してあるが，長い農業経済学研究の歴史の中において，学科開設前もその後も講座の改組・増設があり，それにともない研究者の移動や図書の移動が多かったことがうかがわれる。利用に重点を置く今日，収書時の講座名のみ記されたカードから何十年も前に収書された現物を検索することが多く，現在の講座からその変遷の跡を辿るか，逆の方法により目的の文献に到達することなどを余儀なくされる場合もある。社会科学の領域にまたがる学問の特性から遡及的検索の必要性は当然のことであろう。戦前の資料で図書室に移管されないで講座内において引き継がれているものも少なくない。故に特定の主題と研究者を結びつけて時代を追うと，現在の学科内研究室の中で見つけることができるのである。学科図書室と講座二本立ての収書と保管の方法は現在も継続している。

つぎに蔵書の特性を概観してみよう。もちろん収書と研究者，歴史的背景を除外して特性にふれることは不可能である。詳細にわたっては他の機会にゆずることにするが，ここでは主なる点にふれたいと思う。経済学の始祖ともいわれるアダム・スミスの「国富論」1776年出版の初版本は1919年（大正8）に学科が収書したものである。1918年に農業経済学科が開設されて，その翌年に購入したことになる。この書を中心に大正末期から昭和初期にかけてイギリス，ドイツで出版された学説史，古典理論学者の著書を大量に収書している。たとえば，慶応義塾大学教授高橋誠一郎が「古版経済学書漫談（5）」（経済学月報15号，昭和5，改造社）に「英国における経済学の真の創設者と呼ばれている人アンドリュー・ヤラントン（Andrew Yarranton)…」


AN
INQUIRY
INTO THE
Nature and Causes
OF THE
WEALTH OF NATIONS.
By ADAM SMITH, LL.D. and F.R.S.
Formerly Professor of Moral Philosophy in the University of GLASGOW.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:
PRINTED FOR W. STRAHAN; AND T. CADELL, IN THE STRAND.
MDCCLXXVI.

「国富論」初版

を紹介しているが，なるほど驚くほど長いタイトルのこの著書も当時の収書として書庫に納まっており，これは1677年の初版本である。その他，D. リカードや A. マーシャル (A. Marshal) の "The principles of economics" 1907, J. M. ケインズ (J. M. Keynes) の処女作ともいわれている "Indian currency and finance" 1913年の初版本その他の著書から，農業の研究に経済理論を導入しようとしたことがうかがわれるのである。


ENGLAND'S
Improvement
Will BY Westby
SEA and LAND.
TO
Out-do the Dutch without Fighting,
TO
Pay Debts without Moneys,
To set at Work all the POOR of England with the Growth of our own Lands.
To prevent unnecessary SUITS in Law;
With the Benefit of a Voluntary REGISTER.
Directions where vast quantities of Timber are to be had for the Building of SHIPS;
With the Advantage of making the Great RIVERS of England Navigable.
RULES to prevent FIRES in London, and other Great CITIES;
With Directions how the several Companies of Handicraftsmen in London may always have cheap Bread and Drink.
By ANDREW YARRANTON, Gent.
LONDON,
Printed by R. Everingham for the Author, and are to be sold by T. Parkhurst at the Bible and three Crowns in Cheap-side, and N. Simmons at the Princes Arms in S. Paul's Church-yard, MDCLXXVII.

アンドリュー・ヤラントンの著書

学科開設前についてもふれると，1890年後期に札幌農学校第一期生の佐藤昌介がアメリカ，ドイツに学び農業経済学，殖民論を教え，第二期生の新渡戸稲造もアメリカ，ドイツに留学，農政学，農史を担当，その他の科目として経済原論，応用経済学等があった。当時使用した文献には札幌農学校の蔵書もあったのではないだろうか。それは佐藤昌介の「殖民論講義原稿」(1896年)，「殖民史講義」(1891年)，また学生に参考書として紹介した1830年頃から1899年頃までの文献，たとえば Charles P. Lucas "A historical geography of the British colony" 5v. (1897), Cotton & Payne "Colonies and Dependencies" (1883) 等からも推察される。ここで札幌農学校蔵書についてふれたのは，6～7年前に農経図書室の蔵書として他の蔵書と共に書架上に置かれていたのを325冊選び出し（現在も札幌農学校蔵書印のある図書が残っているので調査中）附属図書館北方資料室の同蔵書に移管したからである。管理・利用面においても，同じ場所にまとまっている方がより効率的であろう。その後，ドイツに留学，T. F. von der Goltz に直接教えを受けた高岡熊雄が農政学，殖民学講座を担当佐藤昌介が農学第二講座を担当することになった。高岡熊雄の「北海道農論」1899年 (明治32) の参考書目としてあげられているのは，ゴルツの著書をはじめとしてドイツ，イギリスの文献39点，日本の文献は主として北海道庁刊行の報告書，統計書，国家学会雑誌等16点，翻訳書は1点である。1913年 (大正2) 経済学財政学講座増設の頃の収書に Charles Davenant "Discourses on the public revenues…" 1698年の初版本がある。1918年学科開設後も欧米の貿易政策，植民地政策，土地，人口等に関する図書・資料，特に現在では稀覯書となっている文献を数多く収集した。またドイツの "Inaugural Dissertation" 1905～1922年までの学位論文1,160冊が当時の収書であることも特筆すべきことであろう。

逐次刊行物の中でも Berichte Uber Landwirtschaft や Econometrica, Journal of Farm Economics (現誌名 American Journal of Agricultural Economics) 等は1921年から1933年の間に受入れを始めて現在まで続いている。学術和雑誌も時局を反映する類のものも見られるが基本的なものは学科の定期刊行物として継続されている。また新聞の切り抜きが主題ごとにまとめてある，約150冊にも及ぶ資料が残されているのでふれてみよう。切り抜きに用いられた新聞は大阪朝日新聞をはじめとする大正5年頃から昭和11～12年頃までの国内新聞と樺太日日新聞，台湾日報，満州日報，河北新報，遼東新報，京城日報，北海道のものでは北海タイムス等で，海産に関する記事は北海タイムスが多いが，その他，産業，石油，生糸，綿糸，満鉄，

支那等に関しては広く上記の各新聞からまとめられていて，手書の索引も各々に付してある。

現在に至る間に経済学部・法学部設置 (1953年)に関連して，農学第三と第四講座が各々移り，教官の移動にともない経済学，農業史，法学関係の文献にも移動がみられた。農業経済学科図書室の中で重要な位置をしめる政府刊行物について，また農村問題，農業移民，産業組合，農地改革や地主制に関する文献の収集も各々の講座を中心に行われてきた時代背景，その他図書室の中のウエストコット・ルイス ライブラリー コレクションの内容にもふれたいと思ったが紙面が限られているのでここでは割愛する。

IV. おわりに

時の動きの中で数多くの研究者，学生，その他の利用者と対話をし続けてきた古い図書，資料は背文字も不明瞭になり，表面の皮も破損してきている。近年復刻・再版が多く出版され，翻訳されたものも蔵書として増加している今日，すでに百年以上も経ている初版本等の管理に特別な配慮が必要であろう。特に学科図書室の蔵書のみならず，研究室において管理されているものについても研究者が交代する際には蔵書も学問の継承の一部として大切にすることが望ましい。農業経済学が自然科学・技術中心の農学の中で社会科学・産業の面より農学を研究するところから図書・資料は古い年代の出版物から現在のものまで各々利用される対象にあるということになる。学科の蔵書が相対的に多いのも学問の特性から当然のことであり，今後も研究が続く限りさらに蔵書は増加し続くだろう。いつでも必要とされる図書・資料また情報が即座に利用者に提供することができるように，これらの蔵書についても，また現在研究されている事がらとの関連面において国内，国外を問わず，図書・資料の検索が容易であるように検索トゥールの整備も行われなくてはならない。蔵書を死蔵させてはならないからである。

(山 里 澄 江)

資 料 紹 介

Opera omnia Bartoli de Saxoferrato (バルトルス全集) 附属図書館所蔵

バルトルス・デ・サクソフェラート (1314–52) は，註解学派あるいは助言学派あるいは後期註釈学派と呼ばれる，イタリア法学派の代表者である。12世紀ボローニャに復興したローマ法学 (註釈学派) は，アーゾにおいて頂点に達し，その弟子アックルシウスの「標準註釈」(glossa ordinaria) によって集大成された (なおアーゾの代表作 Summa codicis, および「標準註釈」も附属図書館に所蔵されている)。ローマ法源の研究という面では，註解学派が註釈学派に加えたものはそれほど多くない。しかし，論述のスタイル (論理学的にみて，より整序されている) や実務への影響力 (助言活動を通じて，直接に裁判実務に影響を与えた) という点で，法学の発展に資するところ大である。バルトルス (あるいはその学派) の影響は，イタリアだけに留まらず，16世紀フランスの法学者デュムラン (彼の影響は，17世紀以後のフランス法学に及んだ。彼の全集も附属図書館に所蔵) や，16世紀以降のドイツのいわゆる「パンデクテンの現代的慣用」の法学者たち (これらの法学者の著作も，附属図書館所蔵のティーメ文庫中に多く含まれて

いる)にも及んだ。

今回購入したバルトルス全集は，1555年（1冊のみ1552年）にリヨンで出版されたものである。バルトルス全集としては定評のある1588年のバーゼル版（東京大学および東北大学所蔵）と比較して，少なくとも全体の構成はほとんど変わらないように思われる。すなわち，「学説彙纂」を三分し，さらにそれぞれの部分を二部に分けて註解を付したもの，「勅法彙纂」を二部に分けて註解を付したもの，「新勅法」の註解，および「助言集二巻」，「設問」，個別問題についての「論文」等から全体はなる。なお，集録されている「助言」の総数も361で，バーゼル版と同じである。そのほかに，註解についてのインデクスがある。

なお付言すれば，本附属図書館には，中世から近世にかけてのローマ法学の原典は，比較的よく整っており（すでに挙げたもののほかにも，古書および復刻版の収集が進められている），重要なもので欠けているのは，バルトルスの弟子バルドゥス・デ・ウバルディス程度である。その意味でも，今回のバルトルス全集の購入は有意義であり，購入に尽力して下さった関係各位に感謝する次第である。（法学部助教授　小　川　浩　三）

諸言語辞典の備付状況

前号「楡蔭」巻頭で，中野教授から言語文化部における各種言語辞典の収集計画についてご紹介ございましたので，関連して附属図書館の各国語辞典の収蔵状況についてご報告致します。附属図書館参考閲覧室には，国語辞典をはじめとして110ヶ国語588種約1,000冊の辞典が備付られています。日・英・独・仏・露語を除く諸言語の対訳辞典は下表の通りです。括弧内は対訳語で，多くは各々について数種類ずつ所蔵しています。一部に北方資料室及び書庫内配架のものも含んでいます。(*印)　（参考調査掛）

Abazin (露)	Ethiopic (英)	Lingala (露)	Syriac (英, 独)
Ainu (日*, 英*, 独*, 露*)	Finnish (日, 英, 独)	Lithuanian (英, 露)	Tagalog (露)
Albanian (英)	Fula (仏, 露)	Luganda (露)	Taiwanese (日)
Amharic (露)	Gilyak (日*, 独*, 露*)	Malagacy (露)	Talysh (露)
Annamese (仏)	Greek (日, 英, 独)	Malayan (日, 英)	Tamil (露)
Arabic (日, 英, 独, 露)	Hausa (露)	Manchu (日, 英, 独, 露)	Tarahumara (英)
Armenian (英)	Hebrew (日, 英)	Mbum (英)	Tatar (露)
Avar (露)	Hindi (日, 英, 露)	Mongolian (日, 英, 露)	Täbris (英)
Azerbaijani (露)	Hungarian (英, 独)	Nanaj (露*)	Telugu (英, 露)
Belorussian (露*)	Icelandic (英)	Nepali (英, 露)	Thai (日, 英, 露)
Bengali (露)	Indonesian (日, 英, 独)	Newari (英*)	Tibetan (日, 英, 露*, 梵)
Bulgarian (英, 露)	Irish (英)	Norwegian (英, 露)	Tongan (英)
Burmese (露)	Italian (日, 英, 独, 仏)	Ordos (仏)	Tungus (露*)
Buryat (露*)	Kalmyk (独*)	Pali (日, 英)	Turkish (日, 英, 独, 露)
Cambodian (日)	Kamchadal (英*)	Persian (日, 英, 独, 露)	Twa (露)
Cantonese (英*)	Kannada (英)	Polish (日, 英, 仏, 露)	Uighur (露)
Chinese (日, 英, 露*)	Khoisan (英)	Portuguese (日, 英, 独*)	Uilta (日)
Chuvash (露*)	Korean (日, 露)	Rumanian (日)	Ukrainian (英, 露)
Coptic (英)	Koryak (露*)	Sambaa (日)	Urdu (英, 露)
Czech (英, 仏, 露)	Kumi (露)	Sanskrit (日, 英, 独)	Uzbek (露)
Danish (英, 露*)	Kurdish (英)	Serbocroatian (英, 露)	Vepsian (露)
Dari (露)	Ladi (日)	Sinhalese (露)	Vietnamese (日, 英, 露)
Dravidan (英)	Laotian (露)	Slovene (英, 独)	Yakut (露)
Dutch (日, 英, 独)	Lari (英)	Somali (露)	Yiddish (英)
Eskimo (英, 露*)	Latin (日, 英, 独, 露)	Spanish (日, 英)	
Esperanto (日, 英, 露)	Latvian (英)	Swahili (日, 英)	
Estonian (露)	Lezghian (露)	Swedish (英, 独, 仏)	

雑誌情報管理システムの展望

北海道大学図書館システム設計実施部会

はじめに

北海道大学図書館オンラインシステムについては，「楡蔭」66号にその全体像がのべられている。本稿は，このうち雑誌情報管理システムについて取り上げ，その目的と手段について詳述するものである。

1 雑誌情報理管システムの目指すもの

「高度情報化社会」の到来が叫ばれる現代において，雑誌論文の果たす役割はますます大きくなってきている。このため，利用者が必要とする情報がどの雑誌のどの号に載っているかを検索するためのツールが多数出版されている。アブストラクトやインデックスなどの二次文献資料がそれである。そして，これらは出版物としてだけではなく機械検索のためのデータベースとしても提供され，広く利用に供されている。したがって，ある程度のタイムラグはあるものの，学術雑誌に発表された論文であるならば，何らかの方法によってアクセスできると考えていいであろう。

しかしながら，他の多くの図書館も同様と思われるが，北大の場合現状において利用者にとって問題なのはこの後であろう。必要な論文の載っている雑誌名と号数までは，前述のようにある程度容易に到達できるのであるが，その雑誌があるのかどうか，あった場合どこにあるのか，さらにその号が現在どのような状態にあるのかを知ることは，残念ながら非常に困難であるといってよいのである。

その理由としては，まずその雑誌があるのかどうかについては，雑誌の誌名の不安定なことと，アクセスポイントの少ないことがあげられる。雑誌名については，最近は，学術雑誌総合目録で採用された，部編名のごく一部の変更も誌名の変更とみなす，きわめて厳密な記述単位のとらえかたが主流となっており，誌名の不安定さに対応できるようになっている。しかし，過去に作成された目録においては，一部の変更などは変遷注記で処理されており，そのことに気がつかなければ，実際には求める雑誌があったにもかかわらず，利用することができないという場合もあったのである。そして，これはアクセスポイントの少なさとも通じている。すなわち，現在のところ雑誌は誌名，それも前述のような問題点のあるものからしか検索できないのであり，他からのアクセスは不可能なのである。

次にその雑誌がどこにあってどのような状態にあるかであるが，この問題についてはそれを知るためのツールがほとんど準備されていないことがその理由としてあげられる。雑誌の所蔵状況を知るためには，雑誌所蔵目録が基本的なツールであるが，一部の部局においては最近のものが発行されているものの，全学的な総合目録としては，和雑誌については昭和44年，洋雑誌についても昭和48年に発行されたものが最新のものとなっており，以後改訂されていない。これを補うものとしては，学術雑誌総合目録があるが，欧文編は過去の3編を統合した新しいものを作成する作業がようやくはじまったばかりであり，和文編は近日中に刊行される予定となっているものの，編集方針もあってすべての雑誌が載っているわけではなく，その上4分冊が予定されており，手軽に検索できるものとはいいがたい。また，これら雑誌総合目録の共通の弱点としては，提供されるのはあくまでその目録の編纂された段階までのデータでしかな

く，最新の情報によって日々更新されることがないことがあげられる。したがって利用者がこれらを検索するには，実際に来館して閲覧カードをひかなくてはならないのであるが，ここでひけるのも当該館所蔵の製本されて一般貸出の可能なものだけで，日々受入られる最新号の到着状況まで把握することは不可能である。さらに，求める号が現在貸出されているのかどうか，あるいは製本中であるのかどうかなどは，現実にその資料にあたってみるまでは知る術はないのである。

北海道大学図書館オンラインシステムの中の雑誌情報管理システムの目的は，これら現状で不可能な点を打破し，利用者に対して必要とする雑誌の必要とする号の所在情報を速やかに提供することである。そのため，雑誌受入システムそのものは，先行大学においてすぐれたものが開発されていることもあり，北大独自の部分はなるべく少なくして開発の負荷を減らし，その分を有効かつ実用的な検索システム，受入システムまでを組込んだオンライン検索システムの実現にふりむけるべく開発に取り組んでいる。

2 提供される情報の形態

前章に述べたように，雑誌情報管理システムの目的は，利用者に対して必要とする雑誌の必要とする号の書誌・所在情報を速やかに提供することである。しかし，雑誌の場合受入後まず一冊(号)単位で配架され，その後製本されて形態が変わるとともに配架場所も変更となる場合が多く，一種類の方法，一種類の画面で所在情報をすべて提供することは，きわめて困難であるといえる。このため，本システムにおいては，雑誌の所在情報を三つのレベルで捕らえ，各レベル毎に異なる形態で情報を提供することとする。三つのレベルとは，まず雑誌の所在情報として大きく分けて全体の所蔵情報と一冊づつの所在情報があり，なおかつ一冊づつの所在情報が未製本の段階と製本後の段階とに分かれるそれぞれのことである。ここでは，全体の所蔵情報を所蔵全巻号レベルの所在情報，未製本の段階の所在情報を一冊(号)単位レベルでの所在情報，製本後の段階の所在情報を製本単位レベルでの所在情報と名付け，それぞれについて以下においてみることとする。

2-1 書誌情報および検索語

書誌情報については，原則として文献情報センターの雑誌目録システムを利用して作成することとする。したがって，記述単位は従来より細かくなり，所蔵の一覧性という点で問題があるものの，誌名の不安定さには十分対応できることとなる。

雑誌目録システムで構築されるデータは，かなり詳細なものであるが，雑誌所蔵巻号・所在表示画面に表示されるものを列挙すると，記述部分として「標題及び責任表示」「版に関する事項」「巻次年月次」「出版頒布事項」「その他の標題」「注記」「変遷注記」「北大雑誌コード」の各項目があり，その後に「検索語」，さらにコード部分として，「NCID」「一般資料種別」「ISSN」「出版国コード」「タイトルの言語区分コード」などがある。

ただし，文献情報センターの雑誌目録システムはいまだ完成しておらず，書誌データとして過去の学術雑誌総合目録のデータを持っているだけである。したがって，現段階では文献情報センターとの対応としては，初期データとして学術雑誌総合目録のデータを使用することにとどめざるをえず，これに無いものはその目録規則にしたがって北大オリジナルで作成せざるをえない。

検索語としては，それぞれ15文字以内の，「誌名(その他の標題も含む)」「誌名中の重要語」「責任表示」があり，さらに「NCID」「ISSN」「北大雑誌コード」からも検索できる。このことによって，アクセスポイントが少ないという問題点は解消されるものと考える(図1参照)。

2-2 所蔵全巻号レベルの所在情報

このレベルの所在情報は，書誌情報と共に雑誌所蔵巻号所在表示画面で提供され，全学の所在単位別に表示される。記述文法は，このレベルの所在情報が文献情報センターへの報告が義務付けられていることもあり，その記述文法を採用する。そして，表示される内容も文献情報センターに報告した最新のものとする。ただし，文献情報センターに登録してある配置コードと，北大のシステムで使用する所在コードの単位が相違している場合だけは，この部分も一致しないこととなる。

このレベルで提供されるデータは，従来閲覧カードで提供されたものと同じであり，全学の所蔵が一覧できるという点ではこれよりもすぐれている。したがって，利用者の多くは，このレベルの情報だけでも，求める雑誌の求める号がどこにあるのかを知ることができるものと思われる（図1参照）。

2-3 一冊（号）単位の所在情報

このレベルの所在情報は，基本的に前述の所蔵全巻号レベルの所在情報を補うものであり，直接検索することはできない。すなわち，雑誌受入状況表示画面に到達するためには，まず雑誌所蔵巻号・所在表示画面を検索しなくてはならない。そして，ここでキーを押して，雑誌最新号所在表示画面へ展開させる。ここでは，全学のその雑誌の最新号の配架場所が表示されるので，利用者は自分に都合のよい配架場所を選択して，雑誌受入状況表示画面に展開させることとなる。なお，最新号配架場所がひとつだけの場合は雑誌最新号所在表示画面は表示されず，直接雑誌受入状況表示画面へ展開する。

このレベルで提供されるのは，現時点でのその雑誌の受付状況や製本中かどうかなどである。すなわち，担当者が受付業務を行った次の瞬間には，検索画面においても受付が表示されることとなる。

このレベルの所在情報の提供によって，従来担当者間の連絡などによって得られていた最新号の受入状況についての情報が，広く全利用者に開放されることとなる。このため，利用者は求める雑誌の求める号がどこにあってどのような状態にあるのかまでを知ることができるのである。

ただし，実際に新しい雑誌受入システムでの業務が開始されるのは61年4月からなので，このレベルの所在情報が蓄積されるにはいま少しの時間が必要となる。このため，この部分の稼働については，2期計画となっている（図2・図3参照）。

2-4 製本単位の所在情報

このレベルの所在情報も，一冊（号）単位の所在情報同様直接には検索できない。雑誌所蔵巻号・所在表示画面で，所在を選択して送信キーを押すことによってのみ到達できるのである。この製本雑誌巻号・所在表示画面では，各製本単位毎に「製本巻号」「製本年次」「資料番号」が表示される。さらに所在情報管理システムと連動しているならば，貸出中であるかどうかの表示もされる。また，雑誌所蔵巻号・所在表示画面においては，欠号の多い巻は学術雑誌総合目録の記述文法に従わなければならないため，たとえば4巻の場合には4（ ）と表示されるので，最終的に所蔵巻号を確認するためには，この画面まで展開しなくてはならないのである。しかし，通常であれば利用者はこのレベルまで展開しなくとも，必要な情報を得られるものと思われる（図4参照）。

3 今後の展望

システム設計実施部会の雑誌担当グループは，60年3月までの準備部会の検討を踏まえ，

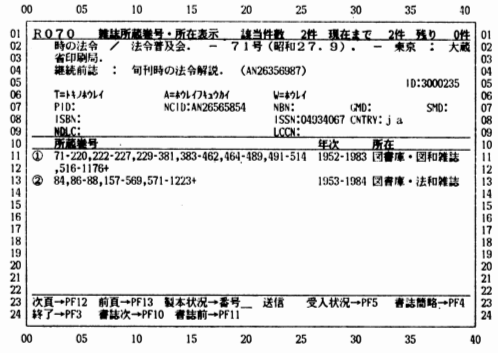

R070 雑誌所蔵巻号・所在表示 該当件数 2件 現在まで 2件 残り 0件
時の法令 ／ 法令普及会. － 71号(昭和27.9). － 東京 : 大蔵省印刷局.
継続前誌 : 旬刊時の法令解説. (AN26356987)
ID:3000235
Tﾆｭｳﾉﾙｳﾚｲ Aﾆｭｳﾚｲﾌｭｯｶｲ Wﾆｭｳﾚｲ
PID: NCID:AN26565854 NBN: CMD: SMD:
ISBN: ISSN:04034067 CNTRY:ｊａ
NDLC: LCCN:
所蔵巻号 年次 所在
① 71-220,222-227,229-381,383-462,464-489,491-514 ,516-1176+ 1952-1983 図書庫・図和雑誌
② 84,86-88,157-569,571-1223+ 1953-1984 図書庫・法和雑誌
次頁→PF12 前頁→PF13 製本状況→番号＿ 送信 受入状況→PF5 書誌簡略→PF4
終了→PF3 書誌次→PF10 書誌前→PF11

図 1

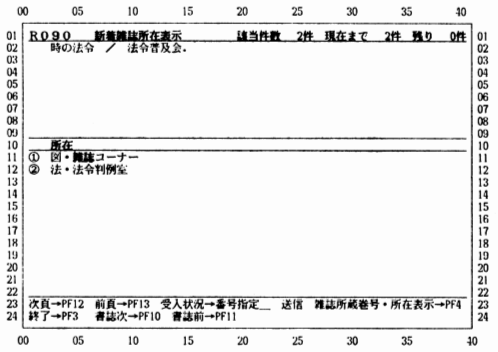
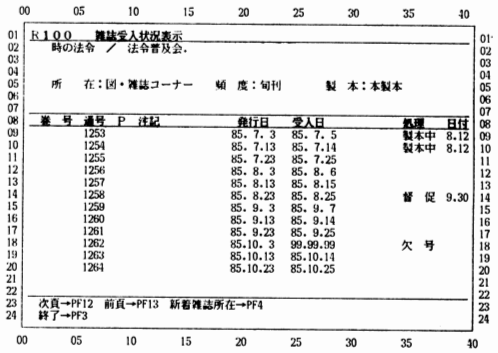
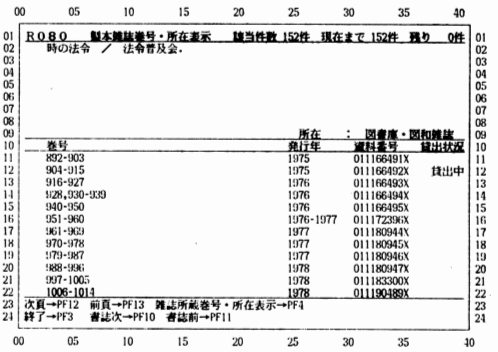

R090 新着雑誌所在表示 該当件数 2件 現在まで 2件 残り 0件
時の法令 ／ 法令普及会.
所在
① 図・雑誌コーナー
② 法・法令判例室
次頁→PF12 前頁→PF13 受入状況→番号指定＿ 送信 雑誌所蔵巻号・所在表示→PF4
終了→PF3 書誌次→PF10 書誌前→PF11

図 2


K100 雑誌受入状況表示
時の法令 ／ 法令普及会.
所 在：図・雑誌コーナー 頻 度：旬刊 製 本：本製本

巻 号	通号	P	注記	発行日	受入日	処理	日付
	1253			85. 7. 3	85. 7. 5	製本中	8.12
	1254			85. 7.13	85. 7.14	製本中	8.12
	1255			85. 7.23	85. 7.25		
	1256			85. 8. 3	85. 8. 6		
	1257			85. 8.13	85. 8.15		
	1258			85. 8.23	85. 8.25	督 促	9.30
	1259			85. 9. 3	85. 9. 7		
	1260			85. 9.13	85. 9.14		
	1261			85. 9.23	85. 9.25		
	1262			85.10. 3	99.99.99	欠 号	
	1263			85.10.13	85.10.14		
	1264			85.10.23	85.10.25		
次頁→PF12 前頁→PF13 新着雑誌所在→PF4
終了→PF3

図 3


R080 製本雑誌巻号・所在表示 該当件数 152件 現在まで 152件 残り 0件
時の法令 ／ 法令普及会.
所在 : 図書庫・図和雑誌

巻号	発行年	資料番号	貸出状況
892-903	1975	011166491X	
904-915	1975	011166492X	貸出中
916-927	1976	011166493X	
928,930-939	1976	011166494X	
940-950	1976	011166495X	
951-960	1976-1977	011172396X	
961-969	1977	011180944X	
970-978	1977	011180945X	
979-987	1977	011180946X	
988-996	1978	011180947X	
997-1005	1978	011183300X	
1006-1014	1978	011190489X	
次頁→PF12 前頁→PF13 雑誌所蔵巻号・所在表示→PF4
終了→PF3 書誌次→PF10 書誌前→PF11

図 4

60年4月以来前記の目標を達成すべく設計にあたってきた。そして，2章に述べてきた形で情報を提供することにより，利用者に対して必要とする雑誌の必要とする号の所在情報を提供できるものとの結論を得た。したがって，雑誌の日常業務，すなわち受付・支払・督促・製本・契約などの電算化も，この形での情報の提供に沿う形で行われるように配慮した。本システムの実現により，利用者は全学にある雑誌について，製本済みであってもそうでなくても，その所在情報をオンラインによって検索できるものと信じる。

今後の展望としては，文献情報センターで予定されている2次情報のサービスが実現すれば，1次情報と2次情報を結び付けた形で検索できることとなり，オンライン検索サービスの一層の充実が期待される。また，システムの展望ではないが，システムの与える効果として，学内における相互利用拡大の機運となることを希望したい。利用者とシステムがよい意味で影響を与えあうことにより，よりよいシステムが実現すると考えるものである。

（文責 富 田 健 市）

◆ 会　　議

第123回 図書館委員会

<と　き　昭和60年9月18日（水）>
<ところ　附属図書館会議室>

議　　題

1. 逐次刊行物等検討小委員会報告について
2. 図書館電算機導入計画について
3. そ の 他

第84回 教養分館委員会

<と　き　昭和60年8月8日（木）>
<ところ　教養分館会議室>

議　　題

1. 昭和60年度参考図書および視聴覚資料の選定について
2. そ の 他

図書担当掛長会議

<と　き　昭和60年10月15日（火）>
<ところ　附属図書館会議室>

議　　題

1. 自然科学系雑誌バックナンバーの集計ならびに収納方針について
2. 電算化に伴うコード体系について
3. そ の 他

第35回　北海道地区大学図書館協議会総会

本年度の地区大学図書館協議会総会は，藤女子大学の当番により，8月23日（金）北海道会館を会場に開催された。22大学42名が出席し，慣例により当番館藤女子大学伊藤館長を議長に選出し議事が行われた。

協議事項等は次のとおりである。

報告事項

1. 幹事館会議
2. 第28回北海道地区大学図書館職員研究集会
3. 各館界の動向
4. 昭和59年度協議会決算・同監査

協議事項

1. 北海道地区大学図書館協議会会費制移行およびそれに伴う規約等の一部改正（案）について
2. 昭和60年度予算（案）について
3. 第36回北海道地区大学図書館協議会総会の当番館について
4. 第29回北海道地区大学図書館職員研究集会の当番館について
5. 役員館の選出について
6. 連絡事項「相互利用マニュアル」について

なお第36回総会当番館は，帯広畜産大学，第29回研究集会当番館は，札幌大学に決定した。

昭和60年度国立大学附属図書館事務部長会議

標記会議が本年10月16日，弘前大学を当番として開催された。これは，事務部制を施く国立大学附属図書館の事務部長を以て組織されている会議で，毎年1回開催されており，当館からは松川事務部長が出席した。

議題等は次のとおりである。

1. 文献情報センター接続に伴う書誌所在情報の登録とりこみに要する通信経費について
2. 電算化に伴う組織・運営の見直しについて
3. 時間外開館について
4. 国立大学図書館協議会の運営の在り方について
5. IFLA 東京大会への対応について
6. 夏期休暇中における大学図書館の相互利用について
7. 図書館職員の研修について
8. 大学図書館の公開と財政的背景について
9. そ の 他

◆ 研 修

昭和 60 年北海道大学図書館職員講習会

毎年秋期に実施している標記講習会は，9 月 26 日（木）本学附属図書館会議室を会場に行われた。

これは，本学等の図書館職員に対して，図書館業務の機械化に関する基礎的知識を付与し，あわせて「学術情報センターシステム」構想に対応した本学内および地区ネットワーク形成に資することを目的としたもので，参加者は，本学図書職員 43 名，北海道教育大学 3 名，北見工業大学 2 名，室蘭工業大学，小樽商科大学，旭川工業高等専門学校，苫小牧工業高等専門学校各 1 名，合計 52 名であった。

当日のプログラムは次のとおりである。

9:00～	開会挨拶	北海道大学附属図書館長 大 野 公 男
	講師紹介	〃 事務部長 松 川 衛
9:15～10:45	講 義	「名古屋大学における図書館オンラインシステム」
		名古屋大学附属図書館学術情報課長 森 岡 祐 二
10:50～11:20		「北海道大学図書館オンラインシステム」
		（報告者 北大・図・図書館専門員） 遠 昭 二
11:20～12:00	質疑応答	司会 北大・図・学術情報課長 山 田 常 雄
13:00～14:30	講 義	「オンライン閲覧用目録について」
		慶応義塾大学文学部図書館情報学科 助教授 上 田 修 一
14:40～16:50	パネルディスカッション	
		「学術情報システムにおけるオンライン目録」
		上 田 修 一
		森 岡 祐 二
		山 田 常 雄
		（北大・整理課目録掛） 諏訪田 義 美
		（北大・閲覧課参考調査掛） 小 西 和 信
		（司会 北大・図・整理課長） 佐 藤 繁 好
16:50	閉会挨拶	北大・図・事務部長 松 川 衛

第28回　北海道地区大学図書館職員研究集会

＜と　き　　昭和60年8月2日（金）＞

＜ところ　　北海学園大学2号館31番教室＞

本年度の研究集会は，当地区21大学140名が参加して次のように行われた。なお，今回から，北海道図書館振興協議会および専門図書館北海道地区協議会からもオブザーバーとして3名の参加があった。猛暑のなか，各参加者とも終始熱心に傾聴し，活発な質疑応答が交され，有意義かつ盛会裡に終了した。

「研究発表」

司会　東海大学　藤井洋子
札幌大学　池内みさを

当館における件名目録の問題点と将来　　札幌医科大学　大前好子

オンライン検索・カードによる整理と利用　　旭川医科大学　小野泰子

司会　北海道工業大学　岩佐直樹
藤女子大学　深見和子

本学における広報活動について　　札幌学院大学　後藤基

「講　演」

学術情報システムの一環としての北海道大学図書館電算化システム

北海道大学　山田常雄

「昭和60年度　大学図書館職員長期研修」を終えて

附属図書館閲覧課閲覧掛　清水弘

本研修は今年で17回目を迎え，7月29日から8月17日までの3週間にわたって図書館情報大学を主会場に筑波大学，東京大学文献情報センター，東京工業大学等で開催され，1週目と3週目は筑波学園地区，2週目は東京地区においてそれぞれ講義（理論，演習），施設見学，共同研究討議が行われました。

この研修の目的は，ますます増大する情報洪水の中で「利用者の高度な要求に即応した情報提供体制を整備する必要」があり，このために図書館職員に対し「学術情報にかかわる諸情勢の発展，知識・技術の開発の現状について最新の知識を教授し，資質の向上を図る」ことにあります。

全国から集まった37名（国立大33名，公立大1名，私立大3名）の研修生は，すでに電算化を経験している人，あるいは導入計画中の図書館からの人等様々ではありますが，皆それぞれ現在構築されつつある学術情報システムに強い関心をもって参加し，猛暑の中熱心に受講しました。

以下研修内容の一部について簡単に述べて見たいと思います。なお，研修プログラムおよび講師の方々の「講義要綱」は参考閲覧室の図書館学資料コーナーに備え付けられていますのでご一読願います。

1週目は学術情報流通体制の国際的動向，データベースの形成，レファレンスサービスの理論と技法等の講義があり，また実際にSCI, SSCI, A & HCI等の二次資料を使用しての演習が行われました。この演習は3週目に行われた機械検索とあわせて，これまで参考調査の経験

が少ない私にとりましてはとても勉強になりました。施設見学では文部省高エネルギー物理学研究所での極微の素粒子の世界，工業技術院電子技術総合研究所でのエレクトロニクス研究を基盤とした情報技術，エネルギー技術，標準計測技術の研究を興味深く見聞しました。

2週目は東京地区へ会場を移し，東京大学文献情報センター，東京工業大学附属図書館で文献情報センターシステムを中心とする講義を受け，また文献情報センターと東工大図書館とのオンラインによる接続方法および書誌データの取り込みと登録の実際作業をつぶさに見てきました。見学は国立国会図書館，NTT 霞が関コミュニケーションセンター，日本経済新聞社，東大大型計算機センター，国文学研究資料館で，新・旧資料のデータベース構築の現場を見ました。なかでも NTT での INS ネットワークを使用しての種々のデモ，とりわけキャプテンシステム，テレビ会議等についてはデモとはいいながら実際目のあたりに見て興味深く感じました。

3週目は再び筑波地区へ戻り，大学図書館の現状と未来像についての講義を受けるとともに，筑波大学学術情報処理センターにおいて UTOPIA に接続している端末機を使用して情報検索の実習を行いました。共同研究討議では「大学図書館の業務電算化」をテーマとしてとりあげました。最初に各館の現状について報告し討論に入ったのですが，私たちのグループ (9名) にはすでに電算化を実施している図書館からの参加者もおらず，また電算化に関する知識や経験も9人9色でいささか抽象的な議論に終った感じがします。しかし学術情報システムに対しては各人とも一致して意欲的に取り組んでいきたいという姿勢を示すとともに，文献情報センターの側からも学総目作成ばかりでなくもっと多面的に各大学図書館に語りかけてほしい旨の意見も出されました。全国の図書館をオンラインで結ぶというこの長大な計画を前にして，各地から集まった研修生が相互に交流を深め，一足先に人的ネットワークを結実させたことが大きな収穫でありました。

最後になりましたが，文部省，図書館情報大学ならびに各講師の皆様方に大変お世話になりました。この誌面をおかりしてお礼申しあげます。

相互利用掛の新設について

当館閲覧課に本年 10 月 1 日付を以て相互利用掛が新たに設置されました。増大する学術情報を利用者に迅速かつ的確に提供することの重要性がますます高まっております。この度の新設は，文献複写，相互貸借を中心とする図書館相互協力業務を一層強化し，利用者サービスの向上を図るものであります。

電算化準備記録 (5)

昭和60年7月末～60年10月

年月日	事項	年月日	事項
60. 7.27	日本電気との定例打合せ会議（第1回）	60. 9.18	第123回図書館委員会(「北大オンラインシステム」の概要説明)
60. 7.30～8. 1	各部局端末設置箇所の電話線，電源，端末配線等の工事費概算見積り調査	60. 9.19	第18回システム設計実施部会
60. 8. 2	道地区大学図書館職員研究集会(「北大システム」について講演)	60. 9.19	第2回図書目録担当者連絡会議
60. 8. 7	第13回システム設計実施部会	60. 9.20	「第1回接続図書館説明会」（文献情報センター）
60. 8. 8	第1回雑誌担当者連絡会議	60. 9.24	第19回システム設計実施部会
60. 8. 9	日本電気との定例打合せ会議（第2回）	60. 9.25	日本電気との定例打合せ会議（第5回）
60. 8.15	「事務電算化に関する協議」文書を，事務局を通し本省情報処理課に提出	60. 9.26	昭和60年度北海道大学図書館職員講習会
		60. 9.27	第2回雑誌担当者連絡会議
60. 8.21	第14回システム設計実施部会	60.10. 3	第20回システム設計実施部会
60. 8.22	第1回図書目録担当者連絡会議	60.10. 4	文献情報センター「目録説明会」
60. 8.27	日本電気との定例打合せ会議（第3回）	60.10. 9	文献情報センター長宛「目録所在情報サービス利用申請書」提出
60. 8.29	第15回システム設計実施部会		
60. 8.30	第3回図書業務電算化委員会および「北大システム」説明会	60.10.11	第21回システム設計実施部会
		60.10.15	全学図書担当掛長会議（北大システム構築作業について，各コード類の作成について）
60. 8.30	第2回道地区図書館機械化開発専門委員会		
60. 9. 3～9. 6	日本電気とシステムについて詳細打合せ	60.10.15～10.17	日本電気とシステムについて詳細打合せ
60. 9. 5	第16回システム設計実施部会	60.10.18	日本電気との定例打合せ会議（第6回）
60. 9. 7	(事務局を通し)「事務電算化に関する協議について「予定通り進めてもよい」旨，本省から回答。	60.10.23	日本電気 O/S 講習会（第1回）
		60.10.23	電子計算機導入に関する図書館ユーザー懇談会（第2回）
60. 9.12	第17回システム設計実施部会	60.10.24	第22回システム設計実施部会
60. 9.13	日本電気との定例打合せ会議（第4回）	60.10.29	第3回図書目録担当者連絡会議

◆ 統　計

部局別蔵書冊数

(昭和60年3月31日現在)

区分 / 部局	和書	洋書	合計	備考
附属図書館	419,407	293,952	713,359	法学部を含む
教養分館	96,834	48,512	145,346	教養部及び言語文化部含む
文学部	75,165	85,766	160,931	
教育学部	56,063	23,213	79,276	
法学部	(54,488)	(97,823)	(152,311)	
経済学部	46,291	37,216	83,507	
理学部	45,615	129,010	174,625	
医学部	79,397	94,703	174,100	附属病院を含む
歯学部	11,946	11,212	23,158	〃
薬学部	4,324	12,145	16,469	
工学部	162,022	129,664	291,686	
農学部	179,885	100,350	280,235	附属農場及び演習林を含む
獣医学部	9,468	18,260	27,728	
水産学部	66,695	40,195	106,890	
教養部	(11,670) 15,855	(4,903) 8,140	(16,573) 23,995	
言語文化部	(13,076)	(37,627)	(50,703)	
環境科学研究科	7,036	3,049	10,085	
低温研	6,140	13,438	19,578	
応電研	4,864	13,498	18,362	
触媒研	2,914	9,417	12,331	
免疫研	1,367	6,322	7,689	
スラブ研センター	(2,050) 955	(30,646) 9,490	(32,696) 10,445	( ) 内は附属図書館に管理換分
大型計算機センター	849	881	1,730	
事務局	1,823	153	1,976	
学生部	621	97	718	
医療技術短期大学部	10,458	1,643	12,101	
合計	1,305,994	1,090,326	2,396,320	

昭和59年度　部局別図書・雑誌受入冊・(種類) 数

区分 / 部局	図書							雑誌						
	和書			洋書			計	和書			洋書			計
	購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他		購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他	
附属図書館	7,018	2,726	[114] 132	9,629	899	[3,543] 3,564	[3,657] 23,968	369	2,394	—	447	535	—	3,745
教養分館	3,934	903	[7,799] 7,969	3,220	346	[26,700] 26,888	[34,499] 43,260	236	25	—	195	—	—	456
文学部	3,161	677	809	4,198	384	466	9,695	285	916	5	488	3	—	1,697
教育学部	2,328	110	[1] 704	561	103	196	[1] 4,002	220	493	—	189	1	—	903
法学部	(1,535)	(545)	(1)	(3,952)	(394)	(13)	(6,440)	(245)	(394)	—	(316)	(33)	—	(988)
経済学部	2,168	378	1,484	1,637	13	674	6,354	155	686	1	233	54	1	1,130
理学部	530	9	200	1,197	9	1,867	3,812	123	313	2	664	292	8	1,402
医学部	603	62	499	647	28	1,982	3,821	326	447	—	768	65	1	1,607
歯学部	546	1	170	299	—	160	1,176	116	124	—	210	30	—	480
薬学部	184	5	39	46	—	550	824	19	39	—	115	2	—	175
工学部	2,478	176	1,074	1,280	248	1,614	6,870	352	916	2	774	39	—	2,083
農学部	2,446	41	560	736	6	838	4,627	422	1,074	15	551	197	4	2,263
獣医学部	126	1	117	156	10	354	764	33	180	—	143	144	1	501
水産学部	839	365	476	188	46	917	2,831	320	640	2	262	292	8	1,524
教養部	(269)	(711)	(15)	(252)	(338)	(61)	(1,646)	(40)	—	—	(102)	—	—	(142)
言語文化部	(1,112)	(6)	(7,832)	(2,916)	(7)	(26,788)	(38,661)	(46)	—	—	(83)	—	—	(129)
環境科学研究科	538	—	267	238	—	235	1,278	36	81	—	113	35	1	266
低温研	237	5	192	80	11	400	925	29	287	2	78	184	1	581
応電研	128	—	10	170	—	387	695	26	56	1	120	10	—	213
触媒研	33	—	19	115	—	227	394	14	7	—	41	23	1	86
免疫研	23	—	—	71	—	129	223	12	—	—	54	102	—	168
スラブ研センター	34	—	11	1,407	—	183	1,635	2	148	1	124	55	1	331
大型計算機センター	28	—	—	34	—	—	62	35	28	—	34	—	—	97
事務局	8	—	—	2	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—
学生部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
医療技術短期大学部	744	—	[702] 825	115	—	[370] 431	[1,072] 2,115	85	41	—	41	—	—	167
合計	28,134	5,459	6,941	26,026	2,103	11,449	80,112	3,215	8,895	31	5,644	2,063	27	19,875

図書：附属図書館，教養分館，教育学部及び医療短大の上段［ ］書は学内管理換により増となった分で内数である。従って全学の受入冊数の合計数は学内管理換分を除いたものである。

昭和59年度 附属図書館利用統計

閲覧室名 / 開館日数 / 利用部局等	書庫出納カウンター 館内閲覧	書庫出納カウンター 館外貸出	開架図書室 館外貸出	語学演習室	参考図書室	北方資料室	合計
	246日	246日	271日	271日	268日	257日	
文学部	263人	972人	2,505人	11人	1,612人	224人	
教育学部	71	143	307	—	201	38	
法学部	322	1,333	3,558	65	547	26	
経済学部	45	89	1,105	38	403	22	
理学部	12	18	2,220	1	195	16	
医学部	4	7	340	6	34	16	
歯学部	5	—	184	7	58	—	
薬学部	2	1	369	—	41	3	
工学部	11	24	1,040	5	131	64	
農学部	12	24	934	2	161	56	
獣医学部	1	1	120	2	29	2	
水産学部	—	—	3	—	5	6	
教養部	124	226	4,334	48	598	106	
各研究所	—	—	—	—	166	29	
医療技術短期大学部	2	7	486	5	14		
教官	108	2,218	464	39			
院生	72	2,767	1,306	67			
職員	33	182	1,031	36			
学外者	373	344	67		444	809	
利用者合計	1,460	8,356	20,373	332	4,639	1,417	36,577人
利用冊数	3,371	21,953	26,641	369巻	147[1]	1,112[2]	53,224冊 369巻

注 1) 国連資料, OECD資料, EC資料, 図書館学資料のみ (参考図書は貸出しない)
2) 館外貸出冊数 (室内利用は含まず)
3) 参考図書室については, 教官・職員・学生こみの人数
4) 北方資料室については, 教官・学生こみの人数

昭和59年度 文献複写・相互利用統計

I. 国内: 附属図書館参考調査掛を経由して学外へ依頼した件数 (国立・私立とも)

申込部局	附属図書館	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	獣医学部
件数	23	298	7	404	4	9	2	2	1	22	7

申込部局	水産学部	教養部	言語文化	環境科学研究所	低温研究所	応電研究所	触媒研究所	免疫研究所	スラブ研究	医技短大	合計
件数	—	6	31	185	6	56	5	9	25	30	1,132

II. 国内： 新方式（国立大学等図書館相互における文献複写）で各部局図書掛等が受付・依頼を行った件数

部局	附属図書館	文	教	経	理	医	歯	薬	工	農	獣医	水産	低温	合計
受付	1,974	—	124	156	—	1,309	—	102	914	1,325	526	394	161	7,005
依頼	507	265	24	126	656	803	98	48	442	207	86	383	81	3,726

III. 国外への依頼件数（参考調査掛）

米	英	西独	カナダ	ソ連	スイス	仏	その他	合計
262	235	78	11	11	7	6	31	645

IV. 図書館間相互貸借（参考調査掛） ○他館への貸出 307冊 ○他館からの借用 199冊

V. 附属図書館マイクロ電子・複写業務実績（館内分を除く）

複写室／申込者	件数注)（件）	複写論文点数（点）	処理枚数・コマ数 総数	内訳 電子複写（枚）	マイクロフイルム（コマ）	マイクロフィッシュ（枚）	引伸焼付（枚）	リーダープリンター（枚）
学内者	395	668	50,019	5,535	16,821	—	188	27,475
学外者	3,247	4,733	66,334	54,965	5,565	65	10	5,729
合計	3,642	5,401	116,353	60,500	22,386	65	198	33,204

注） 件数は申込延人数と同じ。（複写不能分を含まず）

VI. 参考質問（参考調査掛）

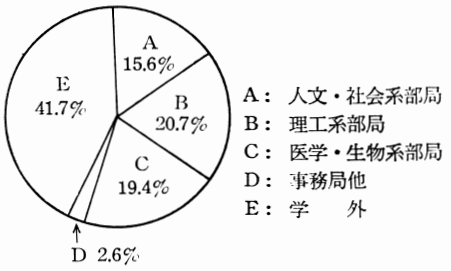
1. 質問部局別件数

文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農	獣	水産
244	45	120	73	374	209	52	81	326	238	78	35
教養	言語	環	低	応	触	免	スラブ	医短	事・他	学外	合計
74	45	67	59	74	37	14	51	38	109	1,754	4,197

2. 質問内容別件数

文献所在調査	2,782
書誌調査	348
事項調査	326
利用指導	600
合計	4,197

3. 質問分野別比率



昭和59年度 教養分館利用統計

(開館日数289日)

閲覧室等名 / 利用部局等	開架図書室 館外貸出		語学演習室		ビデオ視聴室	
文学部	1,815冊	1,036人	18巻	16人	47巻	35人
教育学部	191	114	1	1	1	1
法学部	949	542	5	5	35	30
経済学部	461	284	65	63	47	39
理学部	2,496	1,502	0	0	38	34
医学部	555	369	51	48	174	148
歯学部	130	76	0	0	7	6
薬学部	331	220	0	0	1	1
工学部	2,356	1,405	54	49	51	46
農学部	385	224	6	6	24	21
獣医学部	278	154	0	0	0	0
水産学部	13	9	0	0	0	0
教養部	36,760	23,320	551	507	1,607	1,377
医療技術短期大学部	414	239	1	1	23	20
教官	16,823	622	22	17	55	28
院生	361	213	191	186	108	82
職員	796	475	23	23	37	35
学外者	17	12	17	17	4	4
合計	65,131	30,816	1,005	939	2,259	1,907

昭和59年度 教養分館分類別館外貸出統計

類別	0	1	2	3	4	5	6
冊数	1,109	3,593	569	5,304	5,304	20,712	1,684
類別	7	8	9	文庫・新書	雑誌		合計
冊数	1,566	12,367	5,097	7,416	366		65,131

本学における文献複写（受付，依頼）について

— 昭和59年度国立大学等間文献複写統計から —

国立大学間文献複写経費図書館別収支明細表の昭和59年度上半期，下半期のデータに基づいて全学の文献複写の受付，依頼件数の統計を集計しました。

文献複写全体の件数から見ると国立大学間分は，受付で72%，依頼で57%ですが，図書館間相互協力の現況を十分にうかがえるものと思われます。受付は北海道・東北地区で全体の64%を占め，文献複写の側面ではほぼ地域のセンター館としての役割を担っていると考えられます。一方本学からの依頼の方は，七大学を中心とする蔵書量の大きな図書館や外国雑誌センター館に集中する傾向が強く，上位十館で全体の74%を占めています。これらの館との受付，依頼のバランスを見るといずれも本学からの依頼件数の方が多くなっています。

統計の数値からさまざまな推測や結論を導き出せると思いますが，これらの統計が今後の相互協力活動の一助となれば幸です。（参考調査掛）

I. 文献複写総件数（全部局）

	受付	依頼
国立大学	7,005	3,726
公立・私立大学	1,738	2,205
その他	1,021	
国外		645
計	9,764	6,576

(注1) 本統計の受付依頼件数には，謝絶件数及び複写不能件数は含まれていない。

(注2) 附属図書館の受付件数には，受付館になっていない部局（文，理，歯，触媒研，応電研等）の件数を含む。

II. 国立大学間

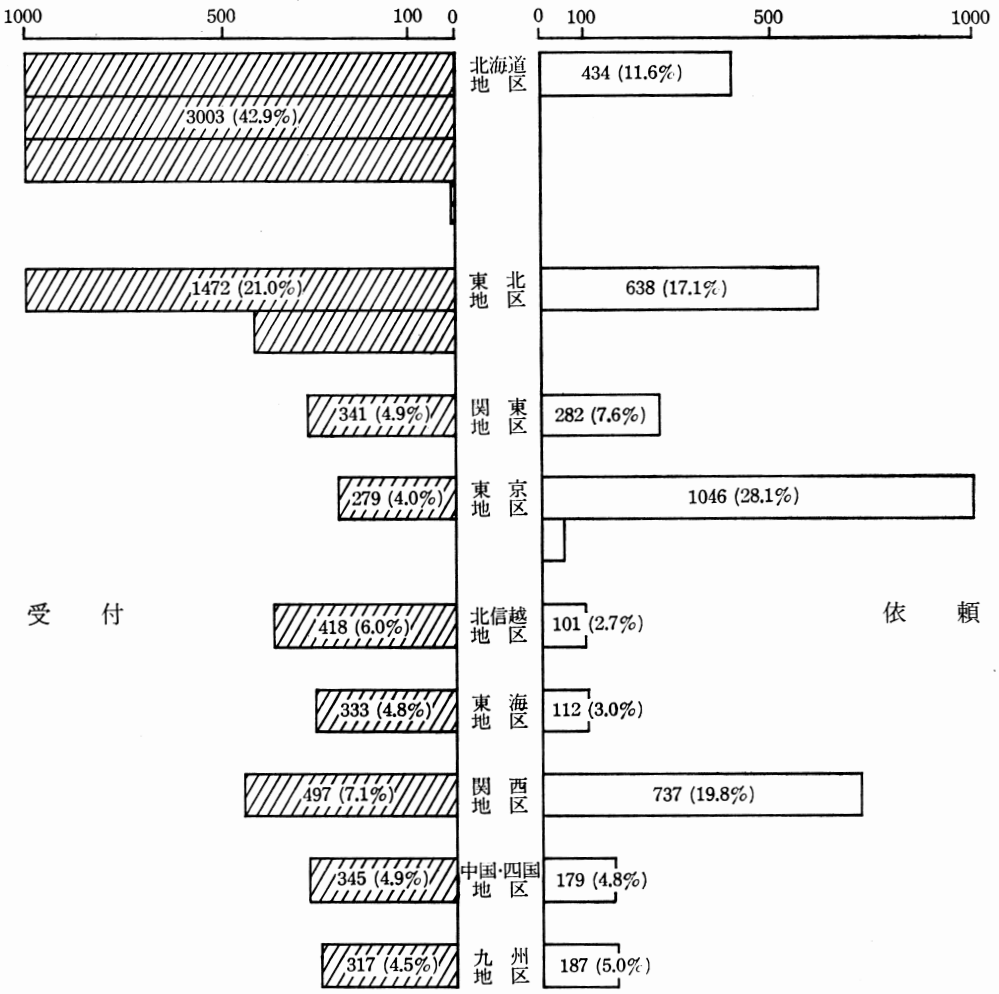
学部別受付・依頼件数

	受付	依頼
附属図書館	1,974	507
文学部		265
経済学部	156	126
教育学部	124	24
理学部		656
工学部	914	442
農学部	1,325	207
医学部	1,309	803
歯学部		98
薬学部	102	48
獣医学部	526	86
水産学部	394	383
低温科学研	161	81
計	7,005	3,726

III-1. 地区別受付・依頼件数

	受付		依頼		相手館	
	件数	(%)	件数	(%)	大学	工専
北海道地区	3,003	42.9	434	11.6	6	4
東北地区	1,472	21.0	638	17.1	7	2
関東地区	341	4.9	282	7.6	10	2
東京地区	279	4.0	1,046	28.1	12	0
北信越地区	418	6.0	101	2.7	9	1
東海地区	333	4.8	112	3.0	8	3
関西地区	497	7.1	737	19.8	14	0
中国・四国地区	345	4.9	179	4.8	13	3
九州地区	317	4.5	187	5.0	14	1
計	7,005	100.0	3,726	100.0	93	16

III-2. 地区別受付・依頼対照図



IV. 受付件数上位20館

順位	大学名	受付件数	累積%	備考(受付上位部局)
1	帯広畜大	838	12.0	農329 医193 獣114
2	旭川医大	806		医580 獣71 農50
3	北海道教育大	638	↑32.6	図339 工82 農73
4	弘前大	582		農190 水114 図74
5	岩手大	264		獣92 農52 工47
6	秋田大	246		医130 図51 工31
7	京都大	237		図98 農42 医41
8	東北大	233		図69 医59 農53
9	北見工大	207		工178 図17 薬5
10	室蘭工大	176	↑60.3	工68 水55 図39
11	小樽商大	160		図133 経12 教8
12	大阪大	141		図90 医14 工12
13	山形大	124		農40 図34 水14
14	東京農工大	106		農48 獣23 低，図各8
15	金沢大	102	↑69.4	農42 図42 医，工各7
16	筑波大	91		図40 農18 医15
17	九州大	80		図56 医9 農7
18	広島大	75		図34 農24 獣7
19	名古屋大	74		農37 図22 工7
19	旭川工専	74	↑75.0	工50 図19 水3

V. 依頼件数上位20館

順位	大学名	依頼件数	%	備考(依頼上位部局)
1	東京大	631	16.9	理127 図85 水84 医74
2	東北大	490		医111 理88 図77
3	大阪大	369	↑40.0	医181 図36 工33
4	京都大	280		理92 文46 水，図各42
5	旭川医大	231		医161 獣22 水19
6	東京工大	218		工113 理69 図12
7	筑波大	170		理66 医40 工19
8	九州大	167		図34 医32 理30
9	一橋大	107		図48 経28 文19
10	名古屋大	96	↑74.1	工26 理20 図18
11	弘前大	84		医16 図14 理，水各12
11	岡山大	84		農38 理22 医12
13	室蘭工大	73		水25 工23 理14
14	神戸大	55		医28 図14 経4
15	東京水産大	49	↑83.3	水25 理18 図6
16	北海道教育大	47		図19 文18 水7
17	広島大	46		水14 医9 文，工各6
18	金沢大	40		図10 文9 理8
19	千葉大	39		図8 医8 水8
20	秋田大	38	↑88.9	医36 獣1 図1

◆ 受贈図書

本学教官著作物

〔本　館〕

○文　学　部

故・奥山次良　現代の哲学と転換の思想　国文社　1984

田中　彰　高杉晋作と奇兵隊（岩波新書317）　岩波　1985

〃　特命全権大使「米欧回覧実記」銅版画集　久米美術館　1985

〃　久米邦武と「米欧回覧実記」展　久米美術館　1985

○理　学　部

松永義夫　化学反応式（化学 One Point 14）　共立出版　1985

田中一　未来への仮説　培風館　1985

○低温科学研究所

木下誠一・福田正巳 (編) Ground freezing ; proceedings of the fourth International Symposium on Ground Freezing, Sapporo, 5-7 August 1985. Rotterdam & Boston, A. A. Balkema, 1985.

木下誠一・福田正巳 (編) ——— vol. 2. 1985.

◇ 人事往来 ◇

○配置換・転任等

岡本憲吉	閲覧課相互利用掛長 (獣医学部図書掛長)	60. 10. 1
竹見悦子	〃 相互利用掛 (整理課会計掛)	〃
樋原光豊	〃 〃 (〃)	〃
山本裕子	〃 〃 (〃)	〃
佐々木光子	医学部図書閲覧掛 (閲覧課参考調査掛)	〃
伊藤秀治	獣医学部図書掛長 (旭川医科大学教務部図書課管理係長)	〃
山内俊子	農学部畜産学科図書室 (農学部図書掛)	〃
斉藤温子	旭川医科大学教務部図書課整理係長 (医学部図書閲覧掛)	〃
首藤佳子	農学部図書掛 (農学部畜産学科)	60. 11. 1

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻67号)
1985年11月30日 発行 発行人 松川 衛
編集委員 遠 昭二 (長)・久原秀志 (図)・山口國雄 (図)・高砂 慶 (図)・藤島 隆 (医)・岡田 潔 (経) 宇野洋子 (理)
発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)
印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561